JA実践事例紹介

JA食農教育の成果と価値を探る（後編）

～宮城県JAいしのまき矢本地区「わんぱく探検あぐりスクール」～

小川理恵
一般社団法人 日本協同組合連携機構 基礎研究部　主席研究員

ＪＡによる食農教育は、どのような成果や価値をもたらすのか――。地域に根差した食農教育に取り組むＪＡの事例を基に探る２回シリーズ。前編では子どもたちの仲間意識や地域の結びつきなどが生まれる効果を紹介した。後編は、あぐりスクールの現場の取材をとおして、子どもたちの体感を伴う食農体験の重要性を伝える。

ＪＡいしのまき矢本地区のわんぱく探検あぐりスクールでＪＡ理事がさつまいもの苗の植え付けを指導

活動の積み重ねによって人気のあぐりスクール

５月の最終日曜日。この日、ＪＡいしのまき矢本地区が実施する「わんぱく探検あぐりスクール」（以後、あぐりスクールと表記）の開校式が行われた。会場となる東松島市大曲五味倉地区の圃場には、子ども22人、保護者23人の総勢45人、15組の親子が集まった。

「さつまいもの苗に『大きくなってね～』と声をかけながら、土のおふとんをかぶせてあげてください！」。子どもたちに優しい口調で語りかけるのは、あぐりスクールで講師を務める同ＪＡ理事の齋藤英彦さんだ。

あぐりスクールのスタートは、齋藤さんが、合併前の旧ＪＡ矢本の青年部長を務めていた1999（平成11）年にさかのぼる。2002年から実施が決定していた学校の完全週５日制を見据え、学校生活では得られないさまざまな体験活動を通じて、子どもたちを地域全体で健やかに育てよう、との認識のもと、国は「全国子どもプラン」を策定した。そのなかの「子ども地域活動促進事業」において、子どもの生活体験・自然体験などの取り組みが推奨され、関係団体への事業の要請が行われた。旧ＪＡ矢本の青年部では、このときすでに子どもたちの収穫体験を実施しており、行政からの要請を受けて、これまでの取り組みを拡大する形で、あぐりスクールを開催することとなった。そのため、現在も東松島市と東松島市教育委員会があぐりスクールの後援をしており、費用の一部を負担している。

「90年代後半に、若者や未成年者による重大な殺人事件が頻発しました。小さなころから命のたいせつさを体で感じていれば、そうした事件を未然に防ぐことができるのではないか、との思いを持って、あぐりスクールに取り組んできました」。齋藤理事は、開始当初から貫き続けている、あぐりスクールへの信念をそう語る。

あぐりスクールは、１年６回のカリキュラムで、年単位で募集が行われる。対象は管内の小学生とその保護者で、募集方法は、主に小学校における市の教育委員会経由でのチラシの配布と、これまでの活動の積み重ねによる口コミが大多数である。絶大な人気を誇り、毎年定数（15組）を大きく上回る応募がある。2023年度は22組の応募があって抽選となった。なかには数年にわたりトライし続け、今年やっと参加が叶ったという家族もいる。

齋藤理事（右）は青年部長時代にあぐりスクールを立ち上げた

残念ながら落選した家族には、ＪＡ事務局が、女性部の開催する

料理教室やＪＡ祭りなどのイベントの案内を送り、参加を促している。せっかく応募してくれた家族とのつながりを手放さない配慮が行き届いている。ある保護者は「昨年は当選とはなりませんでしたが、女性部の料理教室に参加したらとても楽しく、地元農産物の料理レシピなども配付されて大変役立ちました。だから次も必ず応募しようと決めていました。今年は参加できて本当によかったです」と嬉しそうに話していた。

ＪＡ役職員や青年部、女性部が力を合わせ、この日の開校式を迎えた

青年部と女性部のコラボで深みのある食農教育に

あぐりスクールの一番の特徴は、同ＪＡ青年部矢本地区が中心となり、ＪＡ、ＪＡ女性部矢本地区とが力を合わせて実施していることである。特に、青年部と女性部とがコラボレーションしていることで、男性の力強さと女性のたおやかさの両方が生かされた深みのある食農教育が実現している。

青年部矢本地区の菅原修一部長は「夏場のわんぱくスクールでは、女性部が参加者にパイナップルかき氷をふるまい涼を演出してくれました。また、市内でコロナの感染が拡大した時期には、収穫作業を青年部と女性部とが協力して行い、採れたての農作物に女性部お手製のレシピをつけて参加家族に配付したところ、とても喜ばれました。女性部と青年部が一致団結することで、活動がより広がりをもって展開しています」と話す。

開校式では、菅原青年部長（右から3人目）と阿部女性部長（右端）があいさつ

わんぱくスクールの現場でも、女性部員のちょっとした心遣いが生かされている。他の参加者と少し離れた場所でポツンと所在なくしている親子がいると女性部員がさりげなく近づき「こうやって土をかけるといいよ」と声をかけて作業を促す。苗に水をやる場面では、じょうろに限りがあり、手

持ち無沙汰になる子どもたちが出たが、すかさず女性部員が、水分補給用に準備していた紙コップでの水やりを提案した。子どもたちは紙コップを片手に、競い合うように何度も水タンクと圃場を行き来し、ゲーム性を帯びて、会場は運動会のようなにぎやかさになった。

農作業の指導を担当する青年部のメンバーは、子どもたちや保護者に楽しく、そしてわかりやすく伝えるよう工夫を凝らしている。青年部の菅原武浩さんは「子どもたちはすぐに飽きてしまうので、面白いと感じてもらうにはどうすればいいか、伝える側としてとても勉強になります」と話す。

やる気をそがないよう、子どもにかける言葉には何より気を配っている。枝豆の種まきの際に、必要以上に土を深く掘ってしまった子どもには「そんなに掘らないで」と注意するのではなく、「掘るのがとてもうまいね！」と誉め言葉を口にしていた。声をかけられた子どもが、嬉しそうにはにかんでいたのが印象的であった。

全国で開催される農業体験などの参加者は、子どもと母親のペアが大半を占めるが、このあぐりスクールは、両親そろって参加しているケースが多い。それは、青年部と女性部が双方の良いところを活かし、男親も女親も参加しやすい空気を醸しているからではないだろうか。

子どもたちにとってマルチを張る体験も初めて。順番待ちの行列もできた

命のたいせつさを伝えるカリキュラムも

あぐりスクールでは、圃場における農業体験だけでなく、青果市場など、普段は入ることのできない関係施設の見学もカリキュラムに組み込んでおり、それも人気の要因の一つだ。

「養豚場の見学に行ったときのことです。ピンク色をした、生まれたばかりの子豚を、かわいいかわいいと順番に抱っこする子どもたちに『この子豚が大きくなったら、いずれはみんなが食べるお肉になるんだよ』と伝えたんです。すると、子どもたちは子豚をぎゅっとつかんで離さなくなりました。中には涙を流す子どももいました。『命をいただく』とはそういうことなんだ、という事実を肌で感じとってくれたのだと思います。生産現場と食が離れつつあるなか、子どもだけでなくその保護者にも命のたいせつさを実感してもらいたい。そのためには、百の言葉よりも体験することが一番ダイレクトに伝わります。それが食農教育の意義の１つだと思います」(齋藤理事)。

ちなみに、今年２回目となる６月のあぐりスクールでは施設見学として、地区の消防署に出かけたそうだ。子どもたちも保護者も、めったに見ることのできない消防署内部の様子や消防署員のリアルな説明に、真剣に耳目を傾けていたという。

表　2023（令和5）年度　わんぱく探検あぐりスクールカリキュラム

日　程	内　　容
5月28日	開校式・枝豆の種まき・さつまいもの定植
6月25日	施設見学（消防署）・草取
7月下旬	ジャガイモの収穫作業
8月下旬	枝豆の収穫作業・大根と白菜の種まき
11月中旬	収穫祭・試食会（大根と白菜の収穫・豚汁を食べよう）
12月上旬	餅つき体験・閉校式

あぐりスクールで農業に興味を持ち、さらに独自に野菜を育てたいと希望する場合は、あぐりスクールと同じ圃場の一角で「一坪農園」を借りることができる。単なる貸し農園ではなく、青年部らによる農業指導もセットになっているので、あぐりスクールで体験したことを復習しながら実践する格好の場になっている。今年度は、３組の家族がこの一坪農園にも参加している。

あぐりスクールに参加した子どもたちには「野菜を少しずつ食べるようになった」「好き嫌いが少なくなった」などの変化が現れている。さらに、共同作業を通じて、学区を超えた新たな友人関係を築くきっかけにもなっている。それは保護者も同様で、ある母親は「子どもたちが農業体験をしている間に、母親同士でおしゃべりに花が咲きます。あぐりスクールは親世代の貴重な交流の場にもなっています」と話してくれた。

一坪農園では子どもの作業を職員が見守る

初めて会った子どもたちはすぐに仲良し

「子どもたちにも親世代にも、自分で育てて収穫した野菜だからたいせつに食べようという意識が芽生えていきます。豚汁やカレーライスをみんなで作ると『お家で食べるよりもおいしい！』という声が上がります。あぐりスクールは、子どもと保護者両方にとっての食育の場になっています。今後は、子どもたちが農業体験をしている間に、親同士がゆっくり語り合える機会も設けていきたいです」（ＪＡいしのまき女性部矢本地区・阿部紀子部長）。

青年部員は子どもたちにとって地域の「お兄さん」に

「体感」「体験」することの意義

筆者がある学校で、これから農業を目指す若者に、ＪＡ女性部が運営する子ども食堂について話をしたときのことだ。一人の学生から「月にたった一度、子ども食堂を開催しても意味はないのでは？」という素朴な質問があがった。筆者は、「日本の子どもたちは自己肯定感が低い傾向にある。子ども食堂では、そんな子どもが『美味しい』というと、女性部員から『ありがとう。もっと食べてね』という言葉が返ってくる。そうした対応が『自分が美味しいというと喜んでくれる人がいる。自分は生きていていいんだ』という自己肯定感につながる」と話した。ところがその学生はピンとこなかったようで、筆者はどうすれば真意が伝わるか頭を抱えてしまった。

そんなとき、思わぬところから救いの手が差し伸べられた。それは、その学生の隣に座る仲間の学生の放った一言だった。彼は「うまく表現できないけれど、僕にはその意義がわかります」と言うのだ。理由を尋ねると、母親が子ども食堂のボランティアに参加しており、中学生のころから母親に連れられて頻繁に手伝いに駆り出されていたという。そのため、頭ではなく肌感覚でそうした活動の重要性を感じ取っていたのである。このことは「体験すること」がいかにたいせつかを物語っており、こうしたこともまた食農教育の一環といえるのではないかと思う。

ＪＡいしのまきの「わんぱく探検あぐりスクール」は、通算220世帯、722人の子どもとその親（2021年度末現在）に、農業体験を通じて、命のたいせつさや、食と農のつながりを伝え続けてきたことが評価され、昨年度「みやぎ食育表彰奨励賞」を受賞した。「今は物流が進化し、なんでも簡単に手に入ります。でもやはり採れたての地元の農産物にかなうものはありません。子どもたちには、

そうした審美眼も持ってもらいたいと思います。あぐりスクールでは、これからも、命、食べ物、そして郷土を大事に思う心を育てていきます」(菅原青年部長)。

地域の食と農を預かる全国のＪＡが先頭に立ち、食農教育の未来をさらに切りひらいていってほしいと思う。

ＪＡ役職員や青年部員、女性部員があぐりスクールの運営にあたっている。「これからも力を合わせて盛り上げていきたい」と話す